近松門左衛門作

上之巻

大名に生まるゝ種の一粒が。何萬石ぞ幾萬人腹の内からうやまひて。もてはやしたる舌鼓[二]丹波の國の一城主。由留木殿のお湯殿子しらべの。姫はお國腹。金水引の初元結まだ十歳の[三]うちかけも。すらりとしたる生まれ付き束の高家入間殿より。御養子分の約束にて蕾から[四]取る花嫁子。御迎ひの諸侍五千石を頭にて。騎馬が廿騎稚兒醫者は御輿つき。扨大上蔦[五]小上蔦おさし抱き乳母お乳の人。中蔦下蔦の供乘物また者駕籠はいろはづけ。以上四百八十[六]挺金銀瑪瑙枝珊瑚珠。研ぎ出し蒔繪の長柄の傘長刀袋傘袋。時代の金襴鶴菱たすき。花兎窠[七]に霰大内桐。おほひかけたる挾み箱濃い紅の大紐を。高々と結びしは盛りの牡丹にこと[八]ならず。臺所荷は次傳馬お葛籠荷物は通し馬。三十駄の馬方の小唄がなつて小奇麗な。聲[九]のよいのをすぐられしも金に。あかせし吟味なり。刻限は巳の上刻との定めにて。御迎ひ[一〇]の奥家老本田彌三左衞門。數獻の盃足元はよろ〳〵と。猩々緋の道中羽織白い所は髪ばか

り。きんか頭に顔色も[一四]繻珍の裁着り〻しげに。何と〳〵お供廻りが揃つたら。お先手から乘[一五]り出しめされ。是さ文左源五左。身はおさへを乘り申す萬事夜前申し渡す通りだ。若黨中間[一六]荒子小者に至る迄。大酒を致さぬ様に。馬次ぎ舟渡し等にて。がうぎがさつを仕つたらば[一七]出事でおじやんべい。又とさ。泊まり〳〵の赤前垂にじやらくら致さない様に。第一お乘[一八]物の先で見苦しい。さりながらとさ。長の道中下々が退屈致すべい。もし濡れなどを企つ[一九]るとも。目立たぬ様に物蔭へ寄つて。ちよこ〳〵ちよこ〳〵濡れたがよくおんじやる。めでたい折柄と申し殊に女中のお供だ。少々の事は見のがしにしておきめされつちや。あつと[二〇]答へて宰領共。サア御立ちと催す所に奥より女中聲々に。アヽ待たつしやれ〳〵。[二一]氣の毒やお姫様關東へいく事は。いやぢや〳〵とやんちやばかり御意なされ。お袋様も殿様もたらしつ叱つヽあそばせども。どうでもいやぢやとおむつかり。お乳の人滋野井殿色々と申されても。それほど江戸へいきたくば乳母ばかりいきをれと。お乳の人の背中をとん〳〵とぶたしやんして。御機嫌がそこねましたといふ所へ。眉泣きはがし姫君は江戸も東もこちやいやぢや。おれはいかぬと泣く〳〵走り出で給へば。侍衆も下々も。御門に駈け出で家老の外男ぎれこそなかりけれ。お乳の人色を變へこれ申しお姫様。下々の子供さへ九